

■学校経営のポイント

分けられないこともある

喜名 朝博

バッタやトンボは昆虫だが、クモやダンゴムシは昆虫ではない。小学3年生の子どもたちにとって、すべて同じように「ムシ」と括っていたものが、体のつくりに着目することで仲間分けができることを知る。

まさに、分けることは、分かることなのである。

分ければすっきりする

事実と作者の考えを分けて読むことは、説明文の読解の基本である。漢字は偏と旁(つくり)などに分けて見ていくと、その意味が想像できるようになる。歴史も時代区分で分けると理解しやすい。辺の長さに着目して分ければ、三角形は二等辺三角形や正三角形とそれ以外の三角形(不等辺三角形)に分けられる。この見方は他の図形にも応用できる。

日々の授業を通して子どもたちは、分けて考えることや、その分け方を学んでいく。この手法を身につけることは、その後の学びに役立つ。

思考は容易には分けられない

一方、分けられないこともあるという事実を理解することは、これからの人生にとって大いに役立つことになる。

○か×か、賛成か反対か、「閉じた発問」は意思表示を容易にさせるように見える。しかし、子どもたちの中には、「○と×の間の△なんだけど」と思っている子もいるだろう。「賛成、反対、そんなに簡単に決められないよ」と内心不満を抱いているかもしれない。人の思考は単純ではなく、そう簡単には分けられない。立場や状況を深く考えられる子ほど、思い悩むことになる。

だからこそ、「開いた発問」によって多様な考えを引き出し、対話によって思考を広げていくことが大切なのだ。ここで、意識しなければならないのは、唯一の正解に導くのではなく、その時点での最適解や、そ

の場での納得解を求めるというゴールである。

「分ける」ことは、曖昧さを許さないことでもある。しかし、実社会では簡単に分けられないことの方が多。とくに人の思考やアイデンティティに関するものは、他者が一方的に分けるべきものではない。賛成か反対かの安易な質問にはあまり意味はなく、それよりもなぜそう思うのかを問うことが重要であり、そこから議論が始まるのだ。

特別活動の学級活動における合意形成過程でも、話し合いを重ね、少数意見にも耳を傾けることを大切にしている。多数決は最終手段でしかない。

虹は七色ではない

一般的に日本では、虹は七色とする。事実、子どもたちも虹を描こうとすると7つの色を使う。しかし、アメリカやイギリスは6色、ドイツや中国は5色と考えるそう。そもそも、虹はスペクトラム(連続体)であり、その数は色を表す言葉の有無などその国の文化に依存している。

虹の色を分けることで、虹の全体像をとらえやすくする一方、固定観念が生まれ、それ以外の部分が見えなくなってしまう。人はありのままを見ているのではなく、自らが分けたように見ているのだ。分けることは、分かることに違いないが、限定的な分かり方であることに気づかなければならない。

子どもたちも七色ではない

目の前の子どもたちを、教師自身の分け方だけで見えていないだろうか。

子どもを多面的・多角的に理解するとは、子どもたちの中に様々な色を見出すことである。それは、見ようとしなければ絶対に見えない美しい色である。

(きな・ともひろ＝国士舘大学教授／全国連合小学校長会顧問)

マップ&シートで速効理解！

最新の教育改革 2025-2026

金子一彦【著】 B5判／定価 2,640 円

■本の詳細の確認およびご注文は、右QRコードより小社ホームページをご利用ください。



